



献血特集 1. 【人間を救うのは、人間だ。 Together for humanity】

ライオンズクラブの献血アクティビティは、4献（献眼・献腎・献血・骨髄移植）とされるなかの1つです。つまり、クラブのアクティビティの重要度からすれば、上位に位置付けられているはずですが、入会4年目になる筆者は、献血したことは過去にもありましたが、献血の実情については、全く知識がなく、とても身近にできるボランティア活動とだけ思っていました。

今年3月のクラブの献血アクティビティ取材して、4献委員長から、意外なことを聴きました。200ml全血献血による輸血用血液の需要が低下しているために、献血現場においては400ml全血献血を優先するという事実。

日本の血液事業は、昭和31年(1956)6月採血及び供血あつせん業取締法施行から、昭和39年(1964)8月21日閣議決定「献血の推進について」（政府は、血液事業の現状をかんがみ可及的速やかに保存血液を献血により確保するものとする。体制の確立するため、国および地方公共団体による、献血思想の普及と献血の組織化を図るとともに日本赤十字社または地方公共団体による献血受入体制の整備を推進するものとする。）によって献血によって輸血血液を賄うことになったようです。その後、昭和50年(1975)5月 血液及び血液製剤に関するWHO決議【加盟国に対する勧告】 [1.無償献血を基本として各国の血液事業を推進すること 2.血液事業の運営を管理するために効果的な法律を制定し、献血者と献血あるいは血液製剤の投与を受ける者の健康の保持・増進のために必要な措置をとることにする。]によって現在の環境ができあがった。平成元年(1989)9月新血液事業推進検討委員会第一次報告によって日赤が一括して血液製剤を製造する方向性が示され、実施されています。平成2年(1990)に有料採血の完全廃止となり、献血を入口とした血液事業が日本赤十字社により一括して行われることになったという経緯です。

日本赤十字社の血液事業は、人の血液は人の血液によってでしか賄えない現状と、採血はあくまでも人の善意に支えられているという事実を考えたとき、経済活動としては、異質なものであることは理解ができます。輸血による薬害を根絶するために、血液製剤を国内で100%自給する目標や、献血血液の検査精度を向上させたり、日本の血液事業を担う責任において、単純に経済活動のスケールで判断できないことに気が付きます。国内の血液需要は医療技術の進歩などにより1996年をピークとして減少しておりますが、一方で検査精度の引き上げによる経費増などによって、財務状況が悪くなった時期があったようです。2007年を境に様々な改革によって財務内容も改善されてきております。

人の善意に支えられている献血は入口であって、採血後検査をおこない、安全が確認された血液を用いて成分毎に分離して血液製剤を製造する。医療機関からの要請に備え在庫を管理する。製剤毎に保存期限に違いがあり、無駄にならないように、需要予測に基づき、採血量を血液型毎に調整し、献血のお願いをする。

2027年血液需要のピークを迎えるという予測がでているそうです。現在、10代・20代の献血人口が10年前と比べて45%減少しているという事実があります。16歳から18歳までの人は、200ml全血献血しかできません。200ml全血献血でも400ml全血献血でも、検査は同じようにします。輸血の現場では、患者さんに最善の医療を提供する為に400mlを要求してくる。結果として200ml全血献血は不採用になることがある、という現実。効率が悪いから200ml全血の受入れが躊躇される。経済効率を優先すれば、200ml全血献血の受入れを停止した方がよいとする考え方は必然です。日本の血液事業の中長期的な展望を理解しなければ、われわれのアクティビティは十分な成果が上げられないことに気が付きます。

取材をさせていただきました血液センターの担当者は、「自分達に至らぬところがあるから、ライオンズクラブに助けをいただいている。」とおっしゃられました。日本の血液事業を担う責任感が言われた言葉に重さを感じました。そして【人間を救うのは、人間だ。 Together for humanity】というキャッチコピーが日本赤十字社の人たちの、献血による人々の善意を受け継ぎ、命を救う現場に届けるという強い意志を現しているように感じました。

(川澄)

目次：

献血特集1.人間を救うのは、人間だ。	1
委員会協働企画	2
例会紹介	3



次の世代に献血にふれる機会を提供することも、私たちにできる活動です。

<http://ken-love.jp>

講師要請:愛知県豊橋赤十字血液センター

今回の例会卓話は、「愛知県における献血事業の現状」として準備を進めております。献血は、私たちにとって最も身近なボランティア活動のように思っておりますが、そのような認識が定着するまでには、これまでに実践されてきた献血思想の啓蒙、啓発活動があったことを忘れることはできません。献血をお願いする立場になったとき、どんなはたらきかけが必要かを考えなくてはならず、血液事業の全体像を把握する必要性を感じました。

「200ml全血献血よって得られる輸血用血液の需要について」、という論点から出発したら、血液事業の葛藤を垣間見ることになりました。

「血液事業の現状」は、人の善意によって支えられている無償の血液供給と、経済効率の追求という表向きはわかりにくい条件のもとに行われております。最終製品となつては、安全な血液製剤の安定供給責任を担っております。

場面によっては、背反する価値を調整しながら事業が進行する現場が存在します。

人の善意には報いなければならない。医療現場の要請に的確に対応する義務があり、血液製剤による薬害はあつてはならない。という使命を担った日赤血液センターの方々。

今回、愛知県豊橋赤十字血液センター 管理課長 兼 業務課長 秋田氏、同管理課係長 日比野氏 業務課係長 伊藤氏の3氏をお招きし、卓話をお願いします。

事前の打合せを2010年12月22日に岡崎血液ルームで行いました。

当クラブからは、四献・保健委員会 委員長L.大竹いつき と PR・IT委員会 委員長L.川澄 薫 が卓話の準備のために血液事業に関する疑問を献血する立場からなげかけ、お答えをいただきました。

また、日赤血液センターの経営的視点からみたとき、その方針についても教えていただき、中長期的な計画もお聞きできました。

血液事業は、200ml全血献血と若年層の献血者数の低下の問題があり。一方では、医療現場での薬価差益を確保するために、遺伝子組換えアルブミン製剤等への切り替えなどにより、更なるコスト対応への取り組みなど諸問題に対処しており、これからも継続的に改革が進められるようです。

献血車による街頭献血の呼びかけでは、献血のお気持ちがあつても諸事情によって3割程度の方々那不採血になるようです。職域での献血の場合は、2割程度に減少するそうです。献血していただける健康条件や服薬規制などを事前に周知できれば、不採血となる方々の割合が減らせるかもしれません。

献血事業においては、成分献血や400ml全血献血の複数回献血者が増えることがもつとも効率がよいということがわかりました。献血車の運用効率を向上させるためには、献血のお気持ちのある方々へ事前の情報の提供も必要だと思ひます。私たちがライオンズクラブのメンバーが献血について正しい知識を身に付け、献血の意思があつても不採血となつた方々にその理由をご説明できるようになれば、献血の気持ちを持ち続けてくださるかもしれません。

献血アクティビティは、人と人が理解し合うきっかけになるかもしれません。

人間を救うのは、人間だ。Together for humanity. というキャッチコピーは様々な意味をもつて広がって行く気がします。



ご多忙の中、快く打合せに応じていただきました、愛知県豊橋赤十字血液センター

管理課長 兼 業務課長 秋田氏(右)

管理課係長 日比野氏(左)

岡崎竜城ライオンズクラブ

4献・保健委員会委員長 L. 大竹いつき(中)

第914回例会

2010年12月08日 午後12時30分～ 定例会場

この日、岡崎竜城ライオンズクラブ初となる、賛助会員が2名誕生しました。例会卓話は岡崎警察署 生活安全課 警視 河口氏です「最近の犯罪情勢と防犯対策について」のお話です。暴力団の手口等を分かり易く講演して頂き、今後の生活に役立つ内容でした。



新入会員 L.三浦宏之 L.兵藤裕貴

第915回クリスマス家族例会

2010年12月18日 午後6時00分～ 岡崎ニューグランドホテル

今年も年に一度の家族例会がやってきました。この日は、普段の例会とは違った顔が会場を埋めてくれます。家族でライオンズクラブの活動ができることは、とても善いことで、家庭にLIONSの真の意味を伝えるきっかけになるはず。Liberty Interigence Our Nations Safty 今年も自由と叡智によって私たちの国が平和であったことに感謝して、この幸せを全ての人達と共有できるように、明日からも奉仕しましょう。

みんなで楽しい時間を共有できることに感謝して、少し広い視野で一回り広い世界を気遣ってみたいものです。

We serve !

I wish you everything happiness !



編集後記

年の瀬を迎え、献血の呼びかけのために街頭に向かうとおっしゃった、秋田課長。私たちが安全に安心して生活を送られるのも、誰かが支えてくれるからです。協働することの第一歩は、相手を知ること。対話によって気付き、共感することで、意義が理解できる。次の世代と向き合い、何を伝えるか。献血というテーマはとてもいい題材だと思います。四献のなかでもっとも身近な献血から考えを広げてみるのはいかがでしょうか。